# 国史跡河内寺廃寺跡第 22 次発掘調査概要

三次元写真測量による調査トレンチ鳥瞰図（測量・図化　株式会社　相互技研）

東大阪市教育委員会

平成 27 年 3 月

# 例　　言

1　本書は、史跡公園整備に伴う河内寺廃寺跡第 22 次発掘調査概要である。

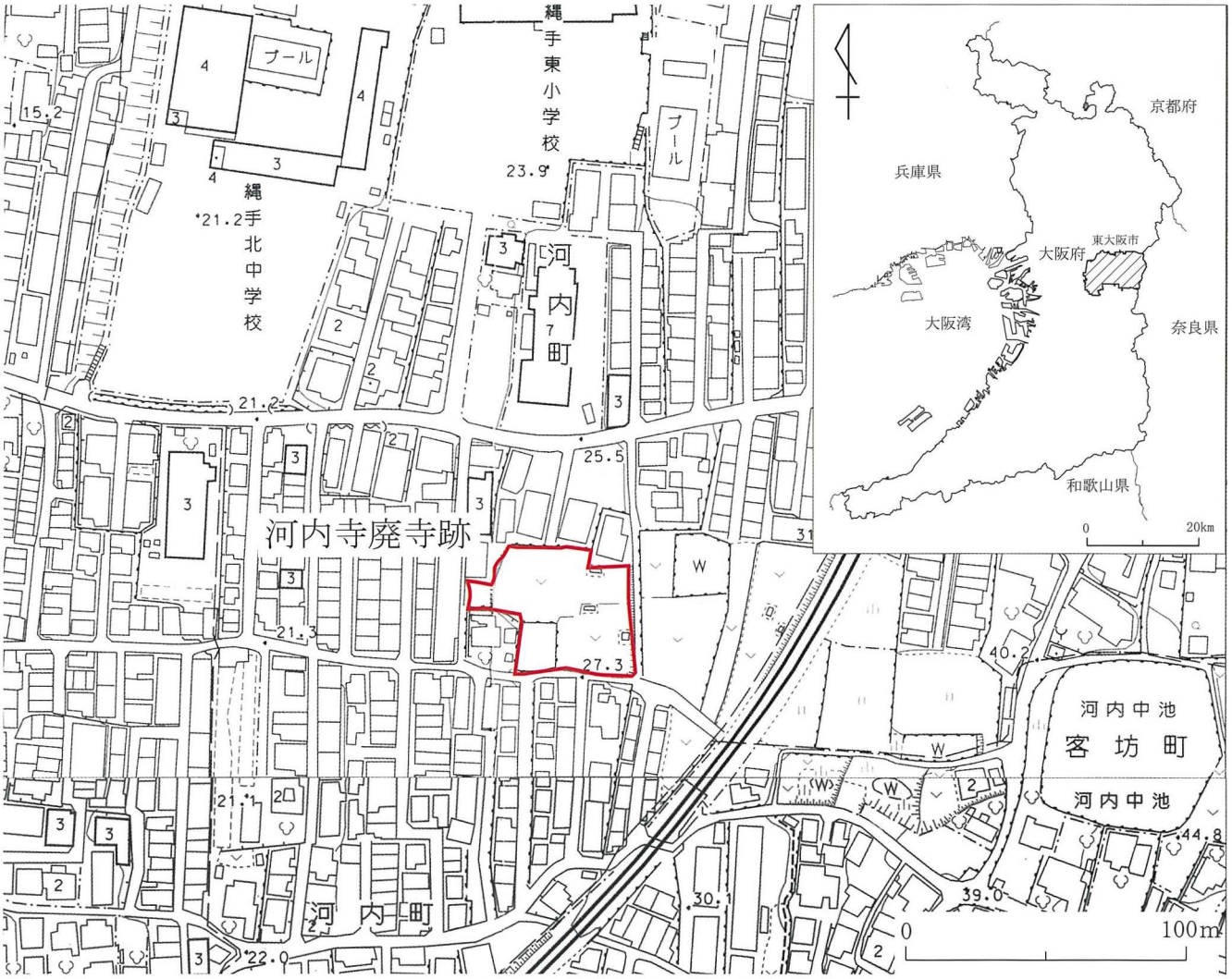
2　調査は東大阪市教育委員会が実施した。

3　現地調査及び本書の執筆は、仲林篤史が担当して行った。

4　考古学用語については、佐原真・田中琢『日本考古学辞典』、文化庁文化財部記念物課『発掘調査の手引き－各種遺跡調査編－』の表記に従った。

5　現地の土色は、農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』（2000 年版）に準拠し、記号表示も同書に従った。

6　現地調査の実施にあたり、以下の河内寺廃寺跡整備委員会の委員に指導及び助言を仰いだ。
大脇　潔　委員長　（元近畿大学文芸学部教授）
増渕　徹　委員　（京都橘大学文学部教授）
菱田　哲郎　委員　（京都府立大学文学部教授）
箱崎　和久　委員　（独立行政法人　国立文化財機構奈良文化財研究所　都城発掘調査部　遺構研究室長）



第 1 図　国史跡河内寺廃寺跡位置図

# 史跡整備に伴う河内寺廃寺跡第22次発掘調査概要

## 1　はじめに

国史跡河内寺廃寺跡は、本市河内町に位置する飛鳥時代後期に建立された古代寺院跡である。これまでの調査研究で、この寺跡の創建には、河内国河内郡の大領であった河内直（連）が関わっていたことや、史跡地内には南北に並ぶ二つの建物基壇と東面回廊基壇の一部が残されていることから、四天王寺式伽藍配置をとっていたことが分かっている。

史跡は、標高27ｍ前後の生駒山西麓の扇状地緩斜面上にあり、近鉄奈良線の線路が瓢箪山駅と枚岡駅との間でカーブを描く部分の西側にある。史跡地周辺は、「河内寺」と書いて「こんでら」とよむ字名が残されており、また周辺の水田からは古瓦が収集されることから、古代寺院がこの地に存在したことが古くから認識されてきた。

伽藍中心地での調査は昭和40年代に3次の調査が行われ、創建時期・氏族、伽藍配置等の検討が行われた。その後保存状態の良好な建物基壇及び礎石が検出された平成16年度の第11次発掘調査を契機に平成20年度までに現状保存がすすみ、公有地化とともに国の史跡に指定された。

平成18・22・23年度に行われた史跡整備のための発掘調査により、建物基壇の規模や回廊の取付き等の考察が行われた。これらの調査により河内寺廃寺跡の概要が徐々に解明されていった一方で、検討すべき問題もまた明らかとなった。今回の発掘調査は、翌年度から始まる史跡整備工事に伴うものである。その結果、後述するように、基壇建物の性格の再検討を行い、これに基づき伽藍配置の再復元を行った。

## 2　調査にいたる経過

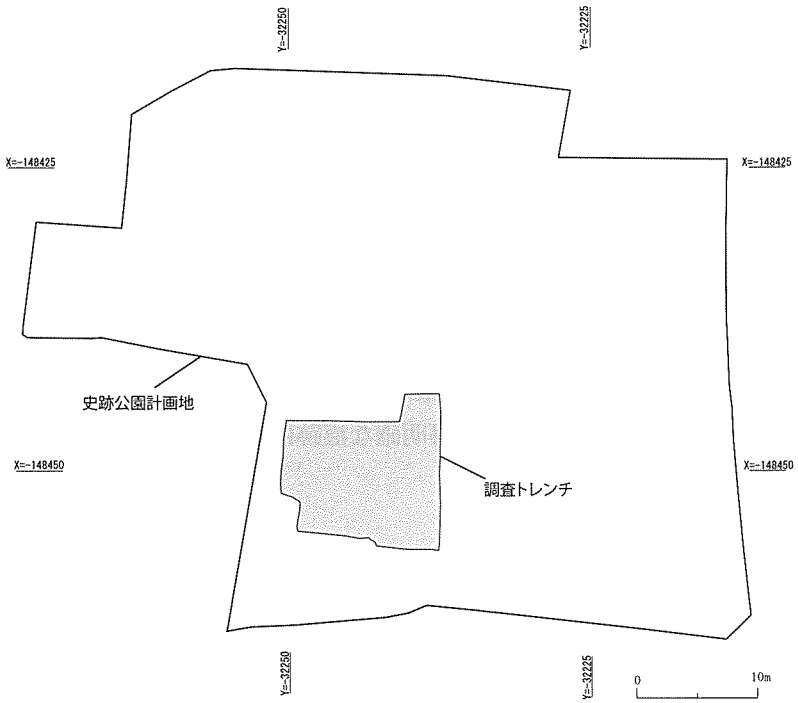
本発掘調査は、河内寺廃寺跡史跡公園整備事業に伴う発掘調査である。調査は、平成25年10月に実施した「河内寺廃寺跡整備委員会」（委員長　大脇潔元近畿大学文芸学部教授）による指導に基づき行った。

調査の目的は、これまで塔跡と考えてきた建物基壇の規模等を再検討するためである。これは、第20次及び第21次発掘調査でそれぞれ検出した基壇東辺のラインが一致しないことや、復元した基壇が正方形ではなく長方形である可能性が考えられたことなど、基壇規模にさらなる検討が必要となったためである。

## 3　調査の概要

調査トレンチは、基壇東辺及び基壇上面に設定した。当初の調査予定面積は84㎡で、最終的な調査面積は131㎡である。調査は平成26年7月10日から平成26年8月31日まで行った。

調査は、基壇上面を人力で発掘し、基壇東辺の石垣の除去には石起こしのために重機を併用して行った。また、調査トレンチ測量は株式会社　相互技研（大阪府東大阪市）に業務委託して行った。図化だけでなく、三次元写真測量により建物基壇を三次元データ化することを目的としたものである（巻頭写真参照）。




第2図　調査トレンチ位置図

### （1）基壇裾部の確認

基壇東辺裾部で、平成22年度調査で検出した石列と礫敷の延長を確認した。礫敷に伴う土師器片から、礫敷は10世紀頃に敷かれたと推定した。礫敷の一部を掘り下げてみると、基盤層である黒褐色粗粒砂層（T.P.25.7m）から5～20cm大の石を2

写真１　創建時基壇裾部の犬走り（東から）

写真２　基壇北東隅検出状況（北東から）

写真３　F2 根石検出状況（西から）

石程度で積み上げた幅約 30cm、高さ約 20cm 程度の石組が石列に据えられた状態で確認できた（写真１）。このことから、石列は、創建時乱石積基壇の化粧石の一段目で、石組は犬走り状の施設（以下「犬走り」と呼ぶ。）であると考えた。

基壇北東隅では、やや丸みを帯びた形で西へ曲がり、北辺へとつながる石の並びを検出した（写真２）。この石の並びは、石列を覆う瓦溜まりの下層にあり、上面レベルの T.P.25.8m は犬走り上面とほぼ同じであることから、犬走りの延長であることを確認した。これにより、基壇の北東隅が良好な状態で遺存していることを確認し、基壇北辺と東辺がそれぞれ確定した。

（２）基壇上面の確認

基壇上面の調査で、これまで塔の東側柱列と考えてきた柱列よりさらに柱間一間分東側の３カ所で根石及び抜取穴を検出した（写真３）。塔であればこの位置に柱があったとは考えられないため、現地にて河内寺廃寺跡整備委員会委員の指導を仰いだうえで文化庁及び大阪府教育委員会と協議し、調査トレンチを北と西へそれぞれ拡張した。拡張したトレンチ北側の未調査部で礎石や礎石抜取穴、根石を検出し（写真４・５）、トレンチ西側では抜取穴（写真６）を検出した。これらの遺構は、塔ではない建物の北と西の側柱列であることを確認した。

今回の調査により基壇上面で検出した柱列は以下のとおりである（第３図）。

まず、北側柱列は、１列及び１'列である。礎石は、後世に１列から１'列へと 0.6 m（２尺）動かされていたことを確認した。基壇北辺西側の断面観察より、北側柱礎石が１列から１'列へと動かされた時期は、１'列の直下にある基壇斜面のにぶい黄褐色（10YR4/3）　極細粒砂層から出土した遺物より、近世であることが分かった。

南側柱列は、５列及び５'列である。平成 22 年度調査で検出したＤ５'礎石は、５列から５'列へと 0.6 m（２尺）動かされていた痕跡を確認した（写真７）。

東側柱列はＦ列で、西側柱列はＡ列である。それぞれ礎石は検出されなかった。

第 11 次発掘調査で、塔の北西及び北東の四天柱の抜取穴と考えられていた箇所を再精査したが、それぞれ据付け又は抜取の掘り形、根石等明確な痕跡は確認できなかったため、この位置に柱はなかったことを確認した。

（３）　遺構の検討

まず基壇規模について検討する。基壇規模は、北･東側柱筋から犬走りまでの距離をそれぞれ軸線で折り返し、東西 13.9 m、南北 12.3 mに復元できた。

次に基壇建物の復元について検討する。検討する建物は、創建時及び後世に再建された建物についてである。

・創建時の建物

今回調査した基壇建物は、塔ではない。建物は桁行五間、梁行四間で、身舎は桁行三間に四面の庇が付き、柱

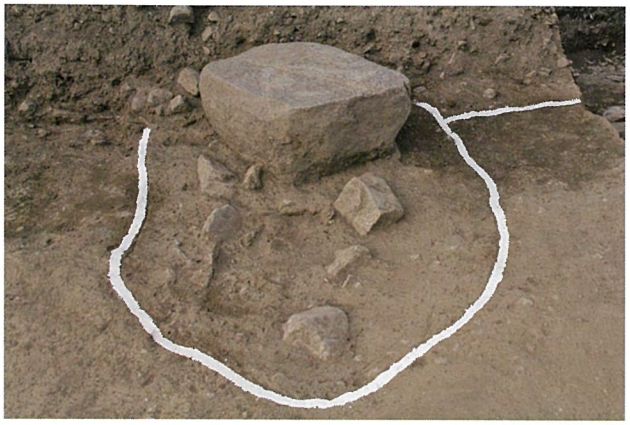
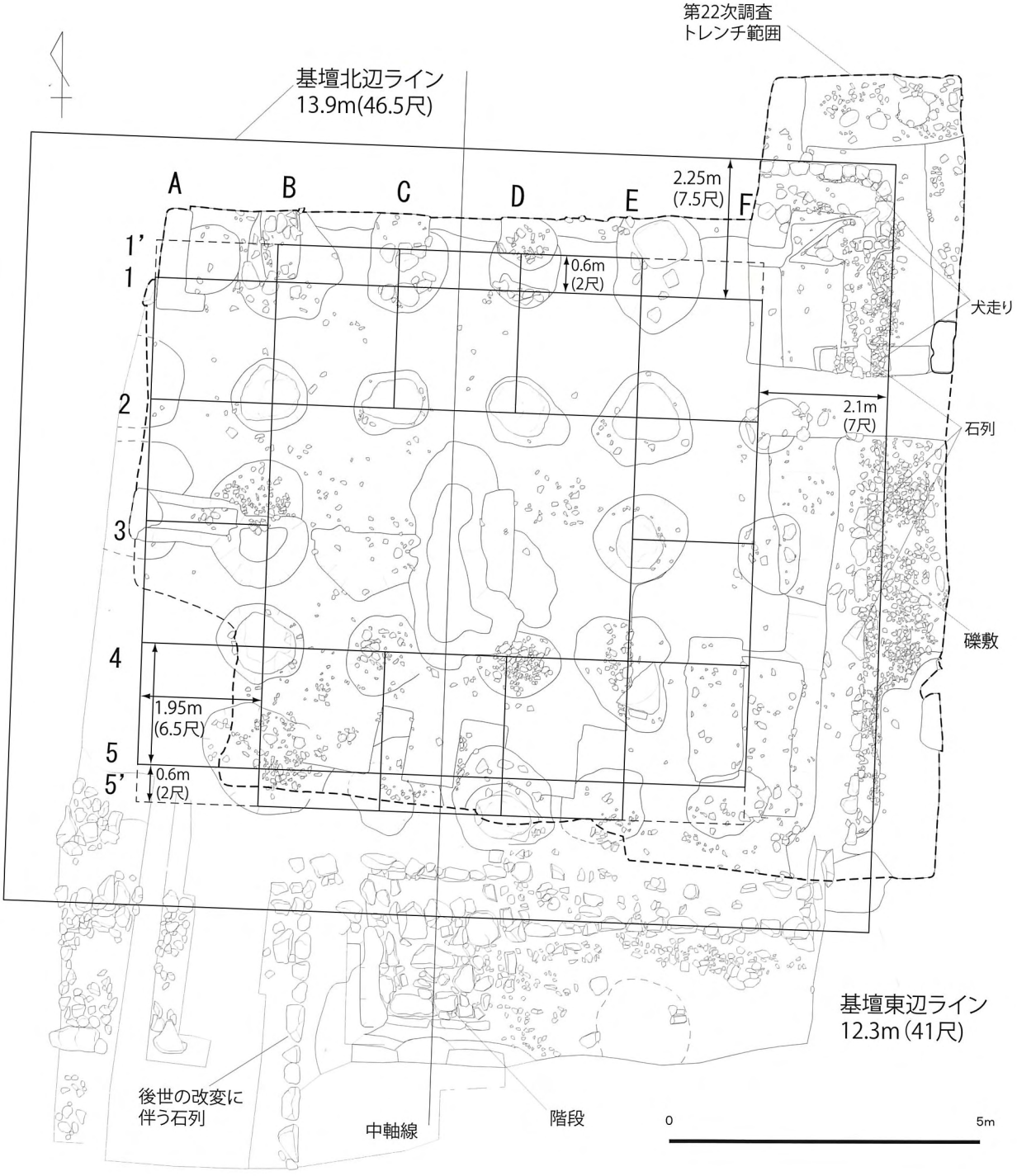


写真４　E1' 礎石及び E1 抜取り穴検出状況（南から）

写真５　D1・D1' 抜取り穴検出状況（南から）




第３図　遺構平面図（過去の調査成果を合成）

間はすべて 1.95 m（6.5 尺）の等間の金堂である。すなわち、北側柱が１列、南側柱が５列、東側柱がＦ列、西側柱がＡ列となり、身舎の桁行はＢ～Ｅ列の三間、梁行は２～４列の二間となる。

・創建時基壇と礎石を再利用した建物

現存する礎石は、東西の側柱礎石全てと身舎の礎石２石が抜かれ、南北の側柱礎石がそれぞれ 0.6 m（２尺）動かされている。一方でＦ列では、５列から５’列へ礎石が動かされた痕跡は確認できなかった（写真８）。したがって、現存する礎石を利用した建物は、南北にＢ列・Ｅ列、東西に１’列・５’列の側柱をもつ正面三間、側面四間の建物であった可能性が指摘できる。

## ４　まとめ

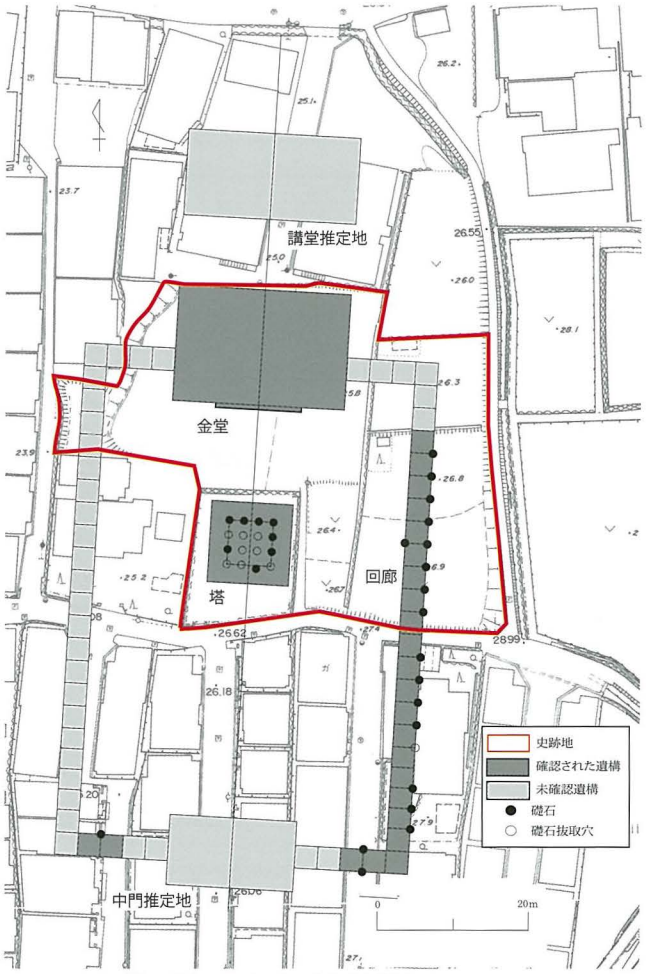
今回の発掘調査で、これまで塔跡と考えられてきた建物基壇は金堂跡であったことが分かった。これによりまず、調査トレンチ北方にあり、これまで金堂跡と考えられてきた基壇は講堂跡となる。そして、未検出となった塔跡は、金堂と南面回廊の中間で、現在は住宅地となっている一角に遺されている可能性が高まった。

以上を踏まえ、河内寺廃寺跡整備委員会にて以下の点についての検討及び助言をいただいた。

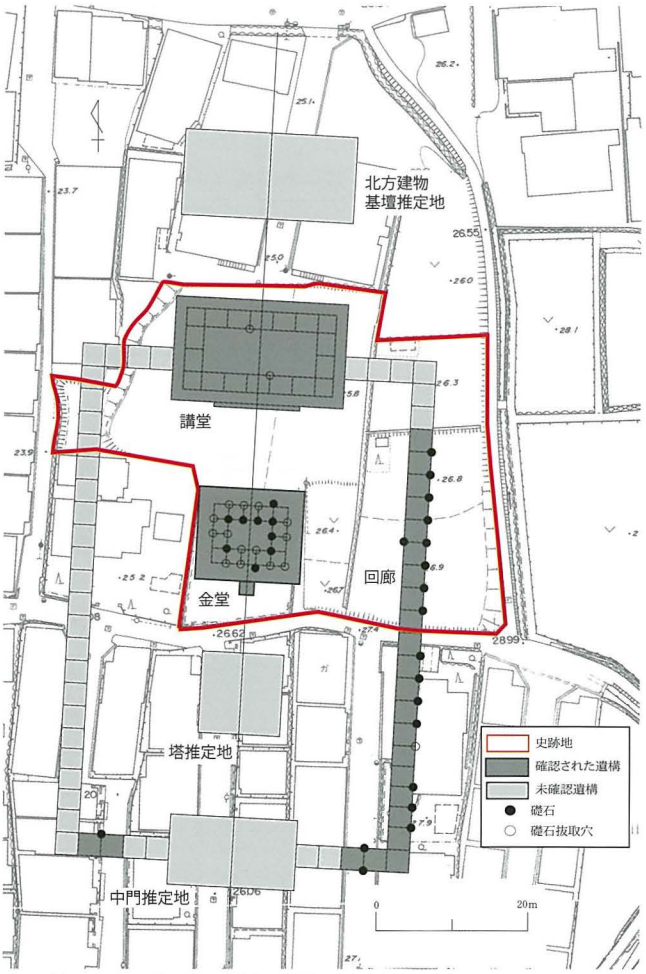
まず、これまで金堂に取り付くと考えられていた回廊は、講堂に取り付くこととなる。回廊の延長と講堂の柱位置を再検討し、第５図のとおり回廊が講堂に取り付く復元案を提示いただいた。

伽藍配置についても、塔が未検出のため薬師寺式伽藍配置の可能性は否定できないものの、東面回廊と伽藍中軸線の距離を考えれば、従前どおり四天王寺式伽藍配置が妥当であるとの意見をいただいた。

また、史跡指定地南側には未発見の塔跡が残されている可能性が高まったため、同地域やその他史跡地周辺についても将来的な遺構保存のための方針を定める必要がでてきた。



第４図　これまでの伽藍配置復元図



第５図　今回の調査成果に基づく伽藍配置復元図

写真６　A3 抜取り穴検出状況(南東から)

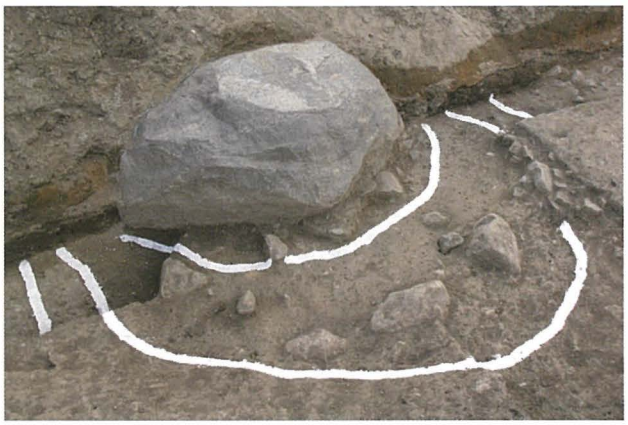


写真７　D5' 礎石及び D5 抜取り穴検出状況(北東から)

写真８　F5 抜取り穴検出状況（南から）

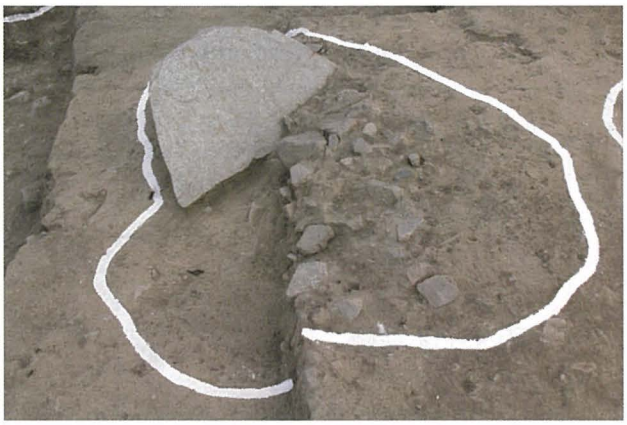


写真９　E4 抜取り穴検出状況（北から）

写真 10　調査トレンチ全景（北東から）

## 報告書抄録(その 1)

| | |
|---|---|
| ふりがな | くにしせきかわちでらはいじあとだい22じはっくつちょうさがいよう |
| 書名 | 国史跡河内寺廃寺跡第 22 次発掘調査概要 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編集者名 | 仲林篤史 |
| 所在地 | 〒577-8521　東大阪市荒本北一丁目 1 番 1 号 |
| 発行年月日 | 2015 年 3 月 31 日 |

| ふりがな<br>所収遺跡 | 所在地 | 市町村コード | 遺跡番号 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| かわちでらはいじあと<br>河内寺廃寺跡 | 東大阪市河内町 441 番、442 番、443 番1、443 番2 | 27227 | 63 | 平成 26 年7月 10 日～8月 31 日 | 131 ㎡ | 史跡整備に伴う内容確認 |

## 報告書抄録(その 2)

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 河内寺廃寺跡<br>(第 22 次調査) | 社寺跡 | 白鳳時代～室町時代 | 金堂基壇、講堂基壇 | 土師器<br>須恵器<br>瓦 | |


**国史跡河内寺廃寺跡第 22 次発掘調査概要**

発行日　平成 27 年 3 月 31 日
編集・発行　東大阪市教育委員会
〒577-8521
東大阪市荒本北一丁目 1 番 1 号
TEL 06-4309-3283
印刷所　グランド印刷株式会社